『わるい王さま（伝説）』

ハンス・クリスチャン・アンデルセン　作
矢崎源九郎　訳

青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）より
一部、studio_o3 が朗読用に構成しています。

底本：「人魚の姫　アンデルセン童話集Ⅰ」新潮文庫、新潮社
1967（昭和 42）年 12 月 10 日発行
1989（平成元）年 11 月 15 日 34 刷改版
2011（平成 23）年 9 月 5 日 48 刷

むかしむかし、心の高ぶった、わるい王さまがいました。

この王さまは「わしの力で、世界じゅうの国々をせいふくしてやろう、わしの名前を聞いただけで、あらゆる人間をふるえあがらせてやりたいものだ」と、こんなことばかり考えていました。

王さまは、火と刀を持って、国から国へと進んで行きました。

王さまの兵隊たちは、畑の穀物をふみにじり、農家に火をつけました。赤いほのおは、めらめらと燃えあがって、木々の葉を焼きはらいました。あとには、まっ黒こげの枝に、焼けた木の実が、ぶらさがっているばかりでした。

かわいそうに、おかあさんたちは、生れたばかりの、はだかの赤んぼうをかかえて、まだ、ぶすぶすと煙のあがっている、かべのかげにかくれました。ところが、兵隊たちは、すみからすみまで、さがしまわりました。うまく、おかあさんと子供を見つけると、まるで悪魔のように、よろこびました。どんなにわるい悪魔でも、これ以上にひどいことはできなかったでしょう。ところが、王さまときたら、こんなことをしても、あたりまえのことのように平気でいるのでした。

王さまの力は、一日、一日と、強くなりました。王さまの名前を耳にすると、だれもかれもが、ふるえあがりました。王さまのすることは、いつもうまくいきました。占領した町からは、黄金や、たくさんの宝物を、持ってかえってきました。

王さまは、りっぱなお城や、お寺や、アーケードなどを、つぎからつぎへと、たてさせました。そのすばらしいありさまを見た人たちは、みんな口をそろえて、「なんという、えらい王さまだ」と、ほめそやしました。

もちろん、こういう人たちは、よその国の人たちの受けている、苦しみのことなどは、考えてもみませんでした。焼きはらわれた町から聞えてくるため息や、なげき悲しむ声には、耳をもかたむけなかったのです。

王さまは、こう思いました。

「わしは、なんというえらい王さまだ。しかし、もっともっと、手に入れねばならん。もっともっと、いろいろなものを！　わしと同じ力を持っているものが、あってはならん。まして、わし以上の力を持っているものが、あってはならん！」

そこで、またもや、となり近所の国々に、戦争をしかけました。どの国をも、かたっぱしから、せいふくしていきました。王さまは、まけた国の王さまたちを、金のくさりでしばって、自分の車にゆわえつけました。こうして王さまは、町じゅうを、ふんぞりかえって乗りまわしたのです。それぱかりではありません。

王さまは、自分の像を、広場や、お城の中に、たてさせました。でも、それだけでは、まだたりません。こんどは、お寺の中の、神さまの聖壇の前にも、たてさせようとしました。けれども、坊さんたちはいいました。

「王さま。あなたは、えらいお方です。しかし、神さまは、もっとおえらいのです。これぱかりは、わたしたちにはできません」

「よろしい」と、わるい王さまは言いました。「それでは、わしは、神さまをもせいふくしよう」

こう言うと、心のおごった、ばかな王さまは、空を飛んでいくことのできる、一そうの船を作らせました。その船は、クジャクの尾のように、美しい色をしていました。そして、何千という、目のようなものを持っていました。ところが、その目というのは、じつは、鉄砲をうつための、穴だったのです。

王さまは、船のまんなかにすわって、ただ、ばねを押しさえすればよかったのです。そうすれば、何千というたまが、いっせいに、とび出すしかけになっていたのです。

強いワシが、何百羽も、船の前に結びつけられました。いよいよ、船はお日さま

めがけて、飛びあがりました。地球は、たちまち、ずっと下のほうになり、やがて、霧と雲の中に、すっかりかくれてしまいました。

ワシたちは、なおもぐんぐん高く、飛んでいきました。

いっぽう、神さまは、かぞえきれないほどたくさんいる天使たちの中から、たったひとりの天使を、おくってよこされました。

すると、わるい王さまは、その天使めがけて、何千というたまを、うち出しました。たまは、天使にあたりました。けれども、天使のかがやくつばさにあたったとたん、はねかえって、雨あられのように落ちてきました。

そのとき、天使の白いつばさから、血が一(ひと)しずく、たった一しずく、したたりました。その一しずくの血は、王さまのすわっている、船の上に落ちました。

と、どうでしょう。その血は、火のかたまりのようになりました。

しかも、何千キログラムもある、おもたいなまりのようになって、船をおさえつけました。船は、ものすごい速さで、地球めがけて落ちていきました。ワシたちの強いつばさも、うちくだかれてしまいました。

王さまは、はんぶん、死んだようになって、船の中にたおれてしまいました。とうとう、船は、深い森の中に落ちて、しげった木の枝にひっかかりました。

「わしは、神さまをせいふくするのだ」と、王さまは言いました。「前に、そうちかった。いったんちかったことは、かならずやりとげてみせる」

王さまは、今度は、七年もかかって、空を飛ぶための船を作らせました。それから、せいふくした国々から、たくさんの兵隊をかりあつめました。ものすごい、大軍隊が、できあがりました。なにしろ、兵隊がひとりひとりならべば、二、三マイル四方の場所が、兵隊でうずまってしまったのですからね。

まず、大軍隊が、船に乗りこみました。王さまも、自分の船に乗ろうとして、船

のそばへあゆみよりました。

と、とつぜん、神さまは、ハチのむれを、王さまのところへ、おくってよこされました。といっても、ほんの小さなハチのむれです。ハチたちは、王さまのまわりをブンブン飛びまわって、顔といわず、手といわず、めちゃめちゃに、さしました。

王さまは、かんかんにおこって、刀を引きぬきました。しかし刀をうちふるっても、空（くう）を切るばかりで、ハチたちにはすこしもあたりません。

そこで、王さまは、

「上等のじゅうたんを持ってこい。わしのからだに、まきつけるんだ」と、家来に言いつけました。「じゅうたんを、からだにまいていれば、いくらハチでも、針をつきさすことはできまい」と思ったのです。

家来は、言いつけられたとおりにしました。ところが、一ぴきだけ、じゅうたんのうちがわにとまっていた、ハチがいました。そのハチが、王さまの耳の中にはいこんで、ちくりとさしたのです。

と、たちまち、王さまの耳は、火のようにあつくなりました。毒は、頭の中にまではいりこみました。

王さまは、身をもがいて、じゅうたんをふりすてました。着物までも、ひきさきました。やばんで、らんぼうな兵隊たちの前で、王さまは、はだかのまま、踊りまわりました。

兵隊たちは、気が狂った王さまをばかにして、げらげら笑いころげました。

なにしろ、神さまの国をせめようとして、たった一ぴきの、小さなハチのために、あっというまに、やっつけられてしまったんですからね。

おわり